

テレビドラマと日常会話から見る終助詞の使用実態

—性差はあるのか—

乾 乃璃子

**Actual Usage of Japanese Final Particles about TV-drama Programs and the Real
—is there the Gender gap?—**

INUI Noriko

Abstract

This paper reveals the gap between males and females, about using Japanese final particles. The research is based on a point of view that Japanese final particles have an influence on a construction or an expression of gender identity.

The investigation is made from 10 acting script books of TV-drama programs and some recorded daily conversation in Japanese Corpus. The results is that there are some differences of the proportion of speaking final particles between males and females, and between acting script for TV-drama programs and some recorded daily conversation.

As a conclusion, Japanese final particles are used more by females in the daily conversation than males, and by males on TV-drama programs than females.

Most of Japanese final particles is common to between on TV-drama programs and in the daily conversation. In particular, “ka” “ne” “yo” “no” are very useful in both of cases.

On the other hand, there are many varieties of final particle which is not spoken by on TV-drama programs.

Keywords: Japanese final particles, gender gap, gender identity, fiction

要 旨

本稿は、終助詞がジェンダー・アイデンティティの構築あるいは表出に関与し得るものであるという観点から、男性の終助詞使用と女性の終助詞使用の違いを明らかにするものである。

2016年放映のテレビドラマの第1話の10本と日常会話を収集した言語データベースから、終助詞が使用されている発話を抽出し、テレビドラマにおける男性と女性の終助詞使用の違い、日常会話における男性と女性の終助詞使用の違い、テレビドラマと日常会話との終助詞使用の違いを調査した。

調査の結果、テレビドラマでは男性のほうが終助詞を使用する傾向が強い一方で、日常会話では女性のほうが終助詞を使用する傾向が強いことが分かった。

また、テレビドラマと日常会話では、出現する終助詞がほとんど共通しており、特に「か」「ね」「よ」「の」の使用率は非常に高いことが明らかになった。ただし、日常会話のほうが出現する終助詞の種類は豊富であることが明らかになった。

キーワード：終助詞、性差、ジェンダー・アイデンティティ、虚構

1. はじめに

本稿の目的は、男性と女性の終助詞の使い方の違いの有無、そしてその違いを明らかにすることである。

終助詞は、主文末に付いて、聞き手に対して働きかけたり発話時の話し手の気持ちを表したりする表現である（日本語文法学会編 2014）。例として、（1）や（2）がある。

（1）いいですね。

（2）そうですか。

（1）の「ね」は、上昇調であれば確認、下降調であれば詠嘆を意味する。また、（2）の「か」は、上昇調であれば疑問、下降調であれば情報受容を意味する。つまり、イントネーションによって機能が異なる場合がある。

また、（3）や（4）のように話者の性別を想起させることもある。

（3）いいわね。

（4）そうだぞ。

（3）は「女性語」、（4）は「男性語」と言われるものの1つであり、このように、コミュニケーションを円滑にしたり人物像を想起させたりすることができ、終助詞には多様な側面がある。

しかし、「女性語」と言われる「わね」「わよね」「かしら」などの使用率は低下し、ほぼ使用されていないことが先行研究によってすでに明らかにされている（小川 2004、尾崎 1999）。

実社会の使用実態とかけ離れているのは、「女性語」が「女性は丁寧な言葉を話すほうがよい」という性規範となる存在から、「役割語」へと変化したためである。「役割語」とは、金水（2003）によると、聞くことで特定の人物像

を思い描くことができたり、特定の人物が提示されることでその人物が話しそ
うだと思ひ浮かべたりすることができる言葉づかいのことであるという。

この話し手と言語の在り方の変化について、中村（2021）は、アイデンティ
ティを話し手に元来備わっている属性のようなものと捉え、「人はそれぞれの
の属性に基づいてコミュニケーションをする」という本質主義の考え方と、「ア
イデンティティを、ほかの人とことばを使って関わり合うことでつくり続ける
もの」だという構築主義の考え方があると説明している。

ここで、構築主義の立場から終助詞を捉えなおすと、女性に使用される終助
詞、男性に使用される終助詞があるのではなく、女性性、あるいは男性性を描
き出すことのできるツールの1つとして終助詞があるといえる。

では、女性語に属する終助詞が衰退しているなかで、女性と男性では終助詞
の使い方に違いがあるのだろうか、あるとすれば、どのような違いだろうか。

本稿では、女性と男性の終助詞使用に着目し、それぞれの使用実態から、終
助詞がどのように用いられているのかを明らかにする。

2. 先行研究と問題の所在

終助詞がもたらす効果について言及している研究に、水本・福盛他（2008）
がある。水本・福盛他（2008）は、水本（2006）でのテレビドラマにおける女
性文末詞の使用実態から、脚本家への意識調査を行い、女性文末詞には演出効
果があること、その演出効果の特徴を明らかにした。「女性文末詞」とは、終
助詞のほか、「でしょう」などの文末表現を含むものである。まず、水本（2006）
から示す。

水本（2006）は、現実の自然会話では女性が女性文末詞を使用していないに
もかかわらず、テレビドラマでは女性キャラクターが女性文末詞を使用してい
る点に着目し、使用実態調査を行っている。調査の結果、現実の女性文末詞の
使用が衰退傾向にあること、テレビドラマにおいてキャラクターの年齢層に
よって文末詞の使用に差が生じていることが明らかにされている。

特に、10代女性が登場するドラマでは、10代女性が必ず女性文末詞を使用し

ていることが指摘されている。それを踏まえ、水本（2006）は、現実における女性文末詞の使用の衰退傾向を脚本家が無視している背景には、「女性は女性語を話すことが好ましい」というジェンダーフィルタが内在している可能性がある」と主張している。

水本・福盛他（2008）は、水本（2006）で指摘しているジェンダーフィルタの存在を確かめるために、脚本家にアンケートによる意識調査を行っている。アンケートの内容は、テレビドラマ内での発話と実社会での発話との関連や、脚本家にとってのテレビドラマの位置づけ、女性文末詞に対するイメージ、使用状況、女性文末詞を使わない理由などである。

水本・福盛他（2008）によると、有効回答の約6割の脚本家が、登場人物のキャラクターや状況設定が伝わる言葉遣いになるよう意識しているという。また、テレビドラマの位置づけについて、有効回答の約3割の脚本家が「虚構の世界」、約4割の脚本家が「現実には起こりうることをドラマティックに脚色した世界」だと考えていることが明らかにされている。

水本（2006）、水本・福盛他（2008）に共通しているのは、男性文末詞の使用に着目していないという点である。脚本家にとって、テレビドラマが現実世界とは異なるものであるという位置づけである以上、男性キャラクターにも、その性格を描き出すために、男性語を使用させている可能性がある。

構築主義の観点から、ジェンダー・アイデンティティを表現するツールとして考えるならば、女性と男性の終助詞の使用実態は比較すべきであろう。

以上を踏まえ、本稿では、テレビドラマ10本において男性と女性が使用している終助詞の種類およびその使用率を明らかにする。また、キャラクターを際立たせているかを確かめるために、日常会話を収集した言語データベースにおいても男性と女性が使用している終助詞の種類およびその使用率を明らかにする。そして、それらを比較し、テレビドラマと実社会では、終助詞の使用実態がどのように異なるのかを考察する。

なお、本稿では終助詞のみを取り扱う。それは、先行研究において「女性語」「男性語」の衰退傾向が指摘されているため、また、文末詞は丁寧さや上品さ

というポライトネスへの関わりが大きいと予想されるためである。

3. 調査対象と調査方法

調査対象は、筆者が選定して文字起こししたテレビドラマ10本分の発話と会話コーパスから抽出した発話である。調査は、調査対象の発話に使用されている終助詞の使用数および使用率を、終助詞別、男女別に明らかにして、比較および考察をするという方法で行う。

調査対象の発話から抽出する終助詞は、「か」「かしら」「け」「さ」「ぜ」「ぞ」「な」「の」「ね」「もの」「よ」の11種を基本とする。ただし、抽出する際には、これらが組み合わされた複合終助詞、例えば「よね」「よな」なども対象としている。抽出された終助詞は、調査結果として4節および5節にて示す。

調査対象として選定したのは、2016年放映のテレビドラマ10本の第1話である。総発話数は7381発話であった。表1に、各テレビドラマのタイトル、脚本家、放送時期、発話数を示す。

なお、これらは、次の2条件を基に選定した。

表1 調査対象のテレビドラマとその発話数一覧

テレビドラマタイトル	第1話脚本家	放送時期	発話数
いつかこの恋を思い出して きっと泣いてしまう	坂元裕二	1～3月	463
家族ノカタチ	後藤法子	1～3月	932
ラヴソング	倉光泰子	4～6月	708
世界一難しい恋	金子茂樹	4～6月	679
好きな人がいること	桑村さや香	7～9月	705
家売るオンナ	大石静	7～9月	895
神の舌を持つ男	櫻井武晴	7～9月	840
Chef～三ツ星の給食～	浜田秀哉	10～12月	751
Doctor X～外科医・大門未知子～	中園ミホ	10～12月	692
逃げるは恥だが役に立つ	野木亜紀子	10～12月	716
発話数合計			7381

- (A) 現代の日本社会を舞台として扱っているもの。
- (B) 脚本以外に原作をもたないもの。

(A) は具体的に、ミステリーやサスペンス、長編シリーズ以外を指し、恋愛を扱っていても、その舞台が現代社会であれば、選定条件はクリアしたものとした。この条件を設定したのは、現代および現実の終助詞使用実態を明らかにするためである。

(B) は具体的に、アニメや漫画、小説が原作ではなく、かつリメイク作品でないものを指す。この条件を設定したのは、テレビドラマと異なる性質の脚色が原作にある場合、脚本に影響して現代の日本社会を描き出せていない恐れがあり、その可能性を排除するためである。

ただし、2条件に基づいたことにより選定本数が不足した都合上、「逃げるは恥だが役に立つ」を追加した。この作品を採用したのは、結婚観や家事について斬り込み、数多くの賞を受賞していたことと、セクシャル・マイノリティであると明かされているキャラクターが存在している点で、男女での言語表現の差異は大きくないと予測したためである。

一方、調査対象として使用した会話コーパスは、『日本語日常会話コーパス』(以下、CEJC とする。)である。コーパスとは、言語データベースのことで、CEJC は日常場面における幅広い年代の実際の自然会話を2016年から2019年にかけて収集したものである。

用例の検索対象は「雑談」とし、その他の「用談・相談」や「会議・会合」は除外した。その理由は、発話者間に社会的距離が生じ、発話者が丁寧な発話を心掛けて終助詞の使用を抑制する可能性があると考えためである。

検索条件は、キー条件「発話単位末から1語、品詞小分類終助詞」として、前方共起条件なし、前方共起条件1「品詞小分類終助詞、キーと結合」、前方共起条件1および2「品詞小分類終助詞、キーと結合」の3種とした。これは、複合終助詞を抽出するためである。検出された用例から、重複しているものと「さや」など方言と見られる終助詞を除いたものを対象とした。

4. テレビドラマにおける終助詞の使用実態

テレビドラマにおいて対象終助詞の使用が見られた発話は2017例あった。出現した対象終助詞の一覧を表2に示す。括弧の中の数字は使用数である。

出現した終助詞は、全部で27種である。もっとも多く使用されていたのは「よ」で、次に多いのが「か」、その次に多いのが「ね」である。その後、「の」「な」「よね」が、最多の「よ」の半数以下ではあるが、続いている。

女性語と言われる「かしら」「わよね」や、男性語と言われる「ぜ」は使用数が10例未満であり、「よ」の512例、「か」の446例に比べて、非常に少ない。女性語として扱われている「わよ」「わね」なども、20例未満である。

では、使用率はどうなっているのか。上位10位までを表3に示す。

表3を見ると、使用数最多の「よ」が約25%、「か」が約22%を占めている。そのため、上位5位までで全体の79.17%、ほぼ8割を占めている。なお、表3から外れた11位以下の終助詞はすべて、その使用率が1%未満であった。つまり、使用数10例未満の終助詞「かしら」「わよね」などは、すでに現実での

表2 テレビドラマに出現した対象終助詞一覧（頻度順）

よ (512), か (446), ね (272), の (210), な (157), よね (129), わ (48), かな (47), ぞ (41), さ (21), わよ (16), かね (16), わね (14), よな (13), なよ (12), かよ (12), もんね (8), かしら (7), じゃん (7), もん (7), もんな (6), かい (4), つけ (4), わよね (3), じゃ (2), ぜ (2), わな (1)
--

表3 テレビドラマにおける高頻出終助詞

順位	終助詞	使用数	使用率	順位	終助詞	使用数	使用率
1	よ	512	25.38%	6	よね	129	6.40%
2	か	446	22.11%	7	わ	48	2.38%
3	ね	272	13.49%	8	かな	47	2.33%
4	の	210	10.41%	9	ぞ	41	2.03%
5	な	157	7.78%	10	さ	21	1.04%

表 4 テレビドラマにおける男性および女性の高頻度終助詞の使用率とその差

終助詞	男性使用率	女性使用率	男女差
よ (512)	61.72% (316)	38.28% (196)	23.44%
か (446)	63.90% (285)	36.10% (161)	27.80%
ね (272)	51.47% (140)	48.53% (132)	2.94%
の (210)	29.52% (62)	70.48% (148)	-40.96%
な (157)	87.90% (138)	12.10% (19)	75.80%
よね (129)	48.84% (63)	51.16% (66)	-2.32%
わ (48)	27.08% (13)	72.92% (35)	-45.84%
かな (47)	59.57% (28)	40.43% (19)	19.14%
ぞ (41)	100.00% (41)	0.00% (0)	100.00%
さ (21)	76.19% (16)	23.81% (5)	52.38%

衰退傾向が指摘されているとおり、テレビドラマでもほぼ使用されていない。

次に、上位10位までの終助詞の、男女別使用率とその差を表4に示す。

表4の男女差を見ると、「ね」「よね」は2%程度しかない。だが、それ以外の8つの終助詞は、最小でも約19%、最大100%の差があることがわかる。男女差がマイナス値であれば、女性の使用率のほうが高いことを意味するが、該当する終助詞は「の」と「わ」のみである。言い換えれば、残り6つの終助詞「よ」「か」「な」「かな」「ぞ」「さ」は男性のほうが使用率が高く、全体的に男性のほうが終助詞を使用する頻度が高いことがわかる。

もっとも男女差が大きいのは「ぞ」の100%で、次に大きいのは「な」の75.8%である。「さ」も約53%あるが、「わ」の約46%、「の」の約41%を考えると、「ぞ」と「な」は、特に男性キャラクターに使用させやすい終助詞であることがわかる。

5. CEJC における終助詞の使用実態

CEJC において対象終助詞の使用が見られた発話は8424例であった。出現した対象終助詞の一覧を表5に示す。括弧の中の数字は使用数である。

出現した終助詞は、全部で34種である。もっとも多く使用されていたのは「ね」である。その次に多いのが「よ」であるが、使用数が「ね」の2806例の

半分以下となっている。その後、「の」「よね」が続いている。

女性語である「かしら」「かしらね」「わよね」「ものね」、男性語である「ぞ」「ぜ」などは使用数が10例未満であり、「ね」の2806例と比べてほぼ使用されていない。具体的に、上位10位までの使用率を表6に示す。

表6を見ると、使用数最多の「ね」はそれだけで約33%、全体の3分の1を占めている。2番目に多い「よ」は15%程度で、「ね」と「よ」を合計すると48.57%でほぼ半分を占めており、「ね」の影響が大きいことがわかる。続く「の」「よね」はともに10%を少し上回る程度、「か」は約7%で、上位5位までで全体の78.39%、ほぼ8割を占めている。

また、6位～10位の「じゃん」「さ」「な」「かな」「つけ」の使用率はすべて、終助詞出現総数に対して5%未満であり、上位4位までの終助詞とは差が開いている。表6から外れた11位以下の終助詞はすべて、その使用率が1%相当あるいは1%未満でほぼ使用されていない。

では、これらの終助詞使用率の男女差はどの程度あるのか。男女別の使用率とその差をまとめたものを表7に示す。

表5 CEJC に出現した対象終助詞一覧（頻度順）

ね (2806), よ (1309), の (979), よね (889), か (621), じゃん (381), さ (328), な (264), かな (254), つけ (191), もんね (91), もん (91), かね (45), わ (41), よな (40), わよ (12), つけな (12), わね (11), もんな (11), かしら (8), じゃんね (8), つけね (5), わよね (5), ぜ (4), かよ (3), なよ (3), もの (2), ものね (2), ぞ (2), じゃんか (2), かい (1), わな (1), じゃんかよ (1), かしらね (1)

表6 CEJC における高頻出終助詞

順位	終助詞	使用数	使用率	順位	終助詞	使用数	使用率
1	ね	2806	33.31%	6	じゃん	381	4.52%
2	よ	1309	15.54%	7	さ	328	3.89%
3	の	979	11.62%	8	な	264	3.13%
4	よね	889	10.55%	9	かな	254	3.02%
5	か	621	7.37%	10	つけ	191	2.27%

表7 CEJC における男性および女性の高頻出終助詞の使用率とその差

終助詞	男性	女性	男女差
ね (2806)	38.38% (1077)	61.62% (1729)	-23.24%
よ (1309)	50.19% (657)	49.81% (652)	0.38%
の (979)	41.98% (411)	58.02% (568)	-16.04%
よね (889)	36.78% (327)	63.22% (562)	-26.44%
か (621)	47.18% (293)	52.82% (328)	-5.64%
じゃん (381)	44.09% (168)	55.91% (213)	-11.82%
さ (328)	53.66% (176)	46.34% (152)	7.32%
な (264)	55.68% (147)	44.32% (117)	11.36%
かな (254)	33.46% (85)	66.54% (169)	-33.08%
っけ (191)	41.88% (80)	58.12% (111)	-16.24%

表7の男女差を見ると、「よ」は1%に満たない。「か」「さ」も10%を下回っている。それ以外の終助詞は、最小でも約11%、最大約33%の差があることがわかる。

4節同様、男女差がマイナス値であれば、女性の使用率のほうが高いことを意味するが、-10%を下回る終助詞は「ね」「の」「よね」「じゃん」「かな」「っけ」の6つであった。女性のほうがわずかに使用率が高い終助詞が多く、男性より終助詞の使用頻度が高いと考えられる。もっとも男女差が大きいものでも「かな」約33%で、その次は「よね」の約26%、「ね」の約23%と続いていく。男女差が40%以上開いている終助詞は見られず、女性特有の終助詞使用があるとは言えない。

6. テレビドラマと CEJC における終助詞の使用実態比較

本節では、4節と5節を踏まえ、テレビドラマと CEJC における終助詞の使用実態を比較して考察する。

まず、テレビドラマでは27種の終助詞が確認された一方で、CEJC では34種の終助詞が確認された。CEJC の34種の終助詞のうち、26種はテレビドラマで確認されたものと同じであった。残りの8種は、「かしらね」「っけな」「っけね」「じゃんか」「じゃんかよ」「じゃんね」「ものね」「もの」で、CEJC のみ

に見られた。これらは「もの」を除き複合終助詞である。

このことから、実際の会話では、終助詞を組み合わせて使用しており、テレビドラマに比べて多様であることがわかる。だが、CEJC のみに見られた複合終助詞はそれぞれ使用数が少ない。そのため、終助詞使用率に基づく使用実態に見られる性差に大きな影響を与えるものではなかった。

次に、テレビドラマと CEJC における高頻出終助詞の使用率をまとめたものを、表 8 に示す。

表 8 を見ると、テレビドラマと CEJC ともに、終助詞別の使用率にばらつきが見られる。また、先述のとおり、テレビドラマおよび CEJC で使用されている終助詞は、それぞれの上位 5 位までで 79.17% と 78.39% で、ともに全体の約 8 割を占めている。よって、少数の終助詞を使い分けていると言える。

表 8 で、テレビドラマおよび CEJC で高頻出で使用されている終助詞を比べると、使用率は異なるものの、上位 5 位以内に「よ」「か」「ね」「の」が共通していることがわかる。これらはすべて聞き手に働きかける終助詞であり、個々の終助詞が女性性や男性性を示唆するために用いられている可能性は低いと考える。

では、どのような点で違いが見られるのか。テレビドラマおよび CEJC で多

表 8 テレビドラマと CEJC それぞれにおける高頻出終助詞

順位	テレビドラマ			CEJC		
	終助詞	使用数	使用率	終助詞	使用数	使用率
1	よ	512	25.38%	ね	2806	33.31%
2	か	446	22.11%	よ	1309	15.54%
3	ね	272	13.49%	の	979	11.62%
4	の	210	10.41%	よね	889	10.55%
5	な	157	7.78%	か	621	7.37%
6	よね	129	6.40%	じゃん	381	4.52%
7	わ	48	2.38%	さ	328	3.89%
8	かな	47	2.33%	な	264	3.13%
9	ぞ	41	2.03%	かな	254	3.02%
10	さ	21	1.04%	つけ	191	2.27%

表9 テレビドラマとCEJCにおける高頻出終助詞の男女別使用率に基づく男女差一覧

終助詞	テレビドラマ	CEJC	終助詞	テレビドラマ	CEJC
か	27.80%	-5.64%	よ	23.44%	0.38%
かな	19.14%	-33.08%	よね	-2.32%	-26.44%
さ	52.38%	7.32%	ぞ	100.00%	—
の	-40.96%	-16.04%	わ	-45.84%	—
な	75.80%	11.36%	じゃん	—	-11.82%
ね	2.94%	-23.24%	っけ	—	-16.24%

く使用されている終助詞の男女差を表9に示す。

表9でも、男女差がマイナス値であれば、女性の使用率のほうが高いことを意味する。マイナス値である終助詞は、テレビドラマでは「の」「よね」「わ」であるが、CEJCでは「か」「かな」「の」「ね」「よね」「じゃん」「っけ」である。日常生活においては女性のほうが使用率が高い終助詞が多く、テレビドラマでは男性のほうが使用率が高い終助詞が多い。

このことから、テレビドラマにおける男性キャラクターの発話には、終助詞全体の使用頻度が高く、演出として意図的に終助詞が付加されている可能性がある。また、実社会では、女性のほうが終助詞全体の使用頻度が高いことがわかる。ただし、女性語が衰退していることと合わせて考えると、終助詞の使い分けによってジェンダー・アイデンティティを構築しているわけではないことがわかる。

以上を踏まえると、会話の展開には性差が生じており、終助詞の使用も、その機能が会話の展開に連動することによって、使用率に性差が生じている可能性がある。

7. まとめと今後の課題

本稿では、男性の発話にも焦点を当て、テレビドラマとCEJCにおいて使用される終助詞および終助詞別使用率、男女別使用率を調査し、その特徴を明らかにした。明らかにしたのは、次の3点である。

- ① テレビドラマでは、女性キャラクターより男性キャラクターのほうが終助詞を使う割合が高く、終助詞によってキャラクターがデフォルメされている。
- ② 日常会話では、男性より女性のほうが終助詞の使用頻度が高い傾向があり、終助詞を用いた話し方や聞き方、返し方に違いがある。
- ③ 使用される終助詞の種類は、テレビドラマより日常会話のほうが多様であるが、どちらも「よ」「ね」「の」「か」を中心に使用されている。

本稿では、テレビドラマおよび日常会話のデータから終助詞の使用数のみを取り出して考察を行った。今後は、終助詞の使用場面、あるいは使用文脈における特徴、特定の使用場面における終助詞の使用率の差異の有無を明らかにしたい。

参考文献

- 小川小百合 (2004) 「話し言葉の男女差—定義・意識・実際—」, 『日本語とジェンダー』 4, 日本語ジェンダー学会, pp. 26-39
- 尾崎義光 (1999) 「女性専用の文末形式のいま」, 現代日本語研究会 (編), 『女性の言葉・職場編』, ひつじ書房, pp. 33-58
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店
- 木村涼子・伊田久美子他 (2013) 『よくわかるジェンダー・スタディーズ』, ミネルヴァ書房
- 中村桃子編 (2010) 『ジェンダーで学ぶ言語学』, 世界思想社
- 中村桃子 (2021) 『「自分らしさ」と日本語』, 筑摩書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』, くろしお出版
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法辞典』, 大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』, くろしお出版
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター 文末詞 (終助詞) 使用実態調査の中間報告より」, 『日本語とジェンダー』 5, 日本語ジェンダー学会, pp. 23-46
- 水本光美・福盛寿賀子他 (2006) 「ドラマに見る女性語「女性文末詞」—実際の会話と

- 比較して一], 『北九州市立大学国際論集』 4, 北九州市立大学国際教育交流センター, pp. 51-70
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」, 日本語ジェンダー学会 (編), 『日本語とジェンダー』, ひつじ書房, pp. 73-94
- 水本光美・福盛寿賀子 (2007) 「主張度の強い場面における女性文末詞使用 実際の会話とドラマとの比較」, 『北九州市立大学国際論集』 5, 北九州市立大学国際教育交流センター, pp. 13-22
- 水本光美・福盛寿賀子他 (2008) 「ドラマに使われる女性文末詞一脚本家の意識調査より」, 『日本語とジェンダー』 8, 日本語ジェンダー学会, pp. 11-26

用例出典

- 大石静『家売るオンナ』 第1話、2016年7月期放映、日本テレビ
- 金子茂樹『世界一難しい恋』 第1話、2016年4月期放映、日本テレビ
- 倉光泰子『ラヴソング』 第1話、2016年4月期放映、フジテレビ
- 桑村さや香『好きな人がいること』 第1話、2016年7月期放映、フジテレビ
- 後藤法子『家族ノカタチ』 第1話、2016年1月期放映、TBS
- 坂元裕二『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』 第1話、2016年1月期放映、フジテレビ
- 櫻井武晴『神の舌を持つ男』 第1話、2016年7月期放映、TBS
- 中園ミホ『Doctor X～外科医・大門未知子～ (第4シリーズ)』 第1話、2016年10月期放映、テレビ朝日
- 野木亜紀子『逃げるは恥だが役に立つ』 第1話、2016年10月期放映、原作 海野つなみ、TBS
- 浜田秀哉『Chef～三ツ星の給食～』 第1話、2016年10月期放映、フジテレビ

使用コーパス

- 『日本語日常会話コーパス (CEJC)』 データバージョン2022.03
(検索アプリケーション『中納言』使用, 2022年9月26日検索)